

情勢報告

安芸市で 23 年度献穀田田植式



早乙女による手植え

本年度は安芸管内が新嘗祭の地域当番となり、安芸市大井地区が決まり、‘黄金錦’を用いた田植え式が 5 月 25 日に催行された。

事前に、安芸市役所、JA 土佐あき、NOSAI 安芸、安芸市農業委員会および振興センターを中心に実行委員会を立ち上げ、会長に JA 土佐あき組合長を選び、この日の式に臨んだ。

神事では、献穀者の所属する地元東川酒米研究会も臨席した。式のクライマックスである早乙女の手植えに出席者一同は見とれていた。

今後、振興センターは献穀者に栽培管理等の助言を行い、9 月下旬の刈り取り（抜穂式）まで気の抜けない日々が続く。

イチジク現地検討会開催



結果枝の配置はコレ！

5 月 26 日、奈半利町イチジク部会の現地検討会を開催し、生産者や関係機関計 8 名が参加した。振興センターからは、結果枝の配置と芽かき、今後の病虫害防除について説明を行い、さらに、青果出荷が少なかった昨年の反省点について意見交換を行った。生産者からは、適期防除についての質問や現地検討会の定期的な開催要望などあり、また、着色促進とアザミウマ対策として白色マルチを導入する生産者がでてくるなど、積極的な動きがみられている。

振興センターでは、青果出荷に向けた適正管理の他に加工品開発でも支援を行う（6 月 27 日にも現地検討会を開催）。

北川村くぶつけ集落営農組合ユズ部現地検討会開催



集会所での勉強会の様子

5 月 27 日に現地検討会を開催し、生産者や関係者計 9 名が参加した。地区集会場で今年の生育状況、今後の防除対策、日頃の疑問点などの意見交換を行った後、各園地を巡回して栽培状況等について確認した。当日は雨だったことから、水田跡地に定植した園地の排水対策が話題となるなど有意義な会となった。生産者からは検討会を毎月開催して欲しいと要望も出た。

それぞれ樹齢が異なり、生育や出荷状況も異なることから、共同作業への取り組みが難しくなっているが、幼木生産者 5 戸で 6 月末から共同防除に取り組むことが確認された。

今後も高品質果実生産に向けた栽培指導や集落営農の取り組みを継続して支援していく。（6 月 28 日にも現地検討会を開催）

トンネルオクラの出荷始まる



現地で摘葉方法を指導

23 年度のトンネルオクラは生えそろいも良好で順調に生育した。しかし、梅雨入りが早かったことから着果が不安定になり、初期収量が少なくなっている。そこで、初期の着果安定と今後の管理、農薬安全使用などを目的に 6 月 7 日に安田町中山地区、8 日北川村および奈半利町を対象に現地検討会を開催した。

参加者から摘葉方法や病虫害防除、肥効調節型肥料など多岐にわたって質問があった。

当振興センターでは今後、オクラ農家の強いまとまりづくりを支援し、エコシステム栽培への取り組みを働きかける。

東洋町の2つの小学校で出前授業を開催！！（東洋町立甲浦小学校、野根小学校）



果樹出前授業の様子



花き出前授業の様子

「高知の特産物ジュニア博士育成事業」の一環で、安芸郡東洋町の 2 つの小学校で、小夏および花きの出前授業を開催した。

6 月 9 日は甲浦小学校の 4、5 年生 16 名を対象に、小夏の授業を実施した。高知の特産果樹について説明した後、小夏の正式な名前が「日向夏」であること、リンゴのようにナイフで皮を剥いて食べるとおいしくて体に良いことなど、小夏の特徴を説明した。勉強した後は、5 年生が地元産小夏の皮をナイフで剥いて、皆で試食し、小夏のおいしい食べ方を実践した。

6 月 10 日は、野根小学校の 6 年生 6 名を対象に、花きの出前授業を実施した。

まず、振興センターが、「こうちの花を知ろう！」と題して、高知県東部で主に生産されている花をクイズ形式で紹介し、それぞれの花きの栽培・特性などについて説明した。次に、フラワーアレンジメントの実習となり、講師の先生から説明を受けたあと、それぞれ自由にアレンジメントを製作した。

両日の授業とも、小学生の関心は高く、「(小夏の皮が) 白くてフワフワしておいしい」「この花、見たことある！！」といった声が聞かれた。また、今回は、東洋町の「ふれあい参観日」の期間中に実施したため、小学生の保護者にも授業を知ってもらうことができた。

今後、11 月にも甲浦小学校で、花きの出前授業が予定されているため、関係機関と連携して取り組んでいく。

水稻後作ブロッコリーを推進！！(JA土佐あき稲作部野根支部総会)



会議の様子

6月17日、JA土佐あき稲作部野根支部の総会（参加者：18戸）で、水稻後作ブロッコリー栽培の奨励を決めた。

振興センターより、平成20年度から現在に至るまで、関係機関で取り組んできた経過や実績について説明するとともに、今後の取り組みについても提案した。

参加者からは「1人あたりの可能な栽培面積は？」「今までにも栽培したことがある」といった意見があり、これまでの取り組みについて一定の理解が得られた。

今後は、当地区でのブロッコリーの産地化を目指し、関係機関とのプロジェクトチーム活動を活発にして、栽培者の増加に取り組んでいく。